



114
A 3439



大正十一年四月
侯爵郵寄贈

支那政府、第一五之部、存心貸金ヲ
為ス、パールトヤ、其約条、議決極ノ
限、在ノ如シ

第一条

貸金ノ事

第一 貸金金額、海英テール七百五十万兩ノ目途ヲ
ルヘシ能レトモ、支那政府、於テ或ル五拾万兩ヲ以テ
之ヲ在ノ在ノ自決ヲ以テ、議決定スヘシ、於自条四
百五十万兩乃至二百五十万兩ヲ以テ、於テハ、第
十二条ノ趣旨ニ従テ、之ヲ議決スヘシ

第二 上海英テール上海規則トシテ、議決スルテ、
ラキル程ヲ、四メース、期及ト定ムヘシ

第三 上海規則トシテ、我貿易規則及定額銀貸金
大 歳 官

善治等トノ比較ニ在リ同ニ於テ六テール半ノ割定ヲ
以テ途トス然リト雖支取政府ヨリ此貸金ヲ返却
スルニ後ノ後限ヲ守スルトキハ其後金ハ我貿易浪
ニ改換シテ枚米ナキ処ヲ以テ所産トシテ此比較ヲ
定ムルハシ

第三條

貸付物貸割及手帳

- 第一 金銀或ハ五枚百兩ヲ貸付スルニ其物貸割
及及交付ノ期ハ一カノ日途ヲ以テスルハシ
 - 一 是乃枚百兩ハ 米穀三枚百石ヲ以テス
 - 一 四枚百兩ハ 海關テールヲ以テス
 - 一 枚百兩ハ 運位派貸ヲ以テス
- 但運位派貸ハ所産大少量ニ其産方ヲ視テ定メシ

一 九枚百兩ハ

銀兩派貸ニ在リ同ニ於テ六テール半ノ割定ヲ以テ
貸付スルハ其物貸割及手帳

共計少ハ五枚百兩

第二 九枚百兩ノ期ハ約定者所即ノ日ヨリ六月
ヲ滿フル日限トシ共派シ方ヲ以テ日途トス尤米ハ
諸物ノ所在ニ寄テ定メ三ヶ月位ニ之ヲ返ハスルハ
シ

第三 物貸交付ノ割及ハ九テール半ニ於テ目的トシ約

定ノ際ニ於テ米穀海菜ニテ定位派貸ニ之ニ減額
セサルハ其貿易派及其他ノ物貸ニ所限大少種ヲ
多クスルノ日途ニテ諸物ノ所在ニ寄テ定メ之ヲ増
減シテ其欠額ヲ定ムルハシ

第三條

物貸價格及其割及ノ事

第一 本邦の我々の九年の間に凡そ中ボ以上ノ
品ト定メ多程其見奉リ推シテ際シ方ヲ注カセ
第二 本邦を以テノ際核ヲ平均四割ニ推シ定メ
其是自ラ可ル三割ヲ減セカニモトシ外日ニ相カラセシ
而シテ其際シ方ニ次ニ揚載スル為港ノ死地ニ推シ
スル尤宜シ海ノ邊ニ是候諸般其他ノ費用ニ我
ニ關係ナキ標ニ注カス

第三 其港ニ長崎、下ノ桑、大坂、兵庫、四日市、横濱
東京、ノ七所ト定メ其外ニ外國船ノ碇泊シ得ル地ナシ
ハ可成大其國所ヲ増スルヲ注カス

第四 本邦以後ノ多額即チ行量ヲ定メ國庫
邦庫並ニ諸般其他ノ細事トシテ部ヲ部ナリ以テ
定付標者ヲ注カス

第五 米ノ價格ニ日下ニテ普通ノ價其際シ方ヲ
カス

第六 海關ニテハ其ノ所ナラシメ海ニテ
トス

第七 定位根據ニ可成其多量ヲ好ムト雖
之ヲ拒メ限度極方兩ノ目的ニテハ海ニ輸送シ其度方
ヲカス

第八 口酒類ニ凡ソ五割ヲ目的トシ上海ニ輸送
テ其際シ方ヲカヘキレトモ其際方ヲ増減スルコトアルヲ
知ス

第九 口酒類ニ其子或ル三割又ヲ以テ貿易銀
是間ニ定メ口率ニテ其極ノ其際方ヲ其度方ヲ
カス

第十 石炭三次炭石産地多クハ物ホニテ
凡ソ五万噸ヲ目的トシ見取ヲ携帶シテ其割及ラ
定ムヘシ

第十一 石炭ノ價格ハ我産出地方廉シテ其價
四割ヨリ低クモ（本邦産ノ物トテ一貨トシテ其價
五割シテ於テ其海ニ輸送スルヤ則チ其運賃ハ亦昂シ
処ヲ以テ其産ノ價格ハ一割之ヲ低クモシ尤其更廉ニ
致スル定附好否ハ記載スヘシ

第十二 酒類ハ丁酒、清酒、蒸餾酒、ボノ見取ヲ携帶
シ其取及ト價格トヲ決定シテ其取及凡ソ五万兩ヲ
目途トシテ其海ニ輸送シテ其海ニ方ヲ為スヘシ

第十三 茶、生油、鐵、小豆、海州材、木炭等ノ
見取及成土見取ヲ携帶シ其取及ト價格ト

ヲ決定シ 知ラ多量ニ交易スル探取力有ラシ
一凡 探取之ヲ願ヒ其價格ハ亦昂ナンカヌ
ナルト見ルトキハ其海ニ方ヲ減額シ又之ヲ止ム
ルヲスヘシ

第十四 取ノ目的ヲ以テ其産地ノ探取中ニテ其探取
ニル定位價格ノ限度アル分ヲ探取地ノ見取トシテ
凡ソ四割五万兩ヲ充テ貿易限額ニテ四割五万
兩ヲ充ツルノ探取ヲレトモ探取ノ取及ニ方ヲ加算
レノ分減額セシテ其貿易限額ニ其取及シ方ヲ
為ストヘシ

第十五 取取ノ取及ニ分ノ取及及價格ハ其地
取取ト見取及ニ其取及ノ探取ニ其取及之ヲ約
定スヘシ尤探取ヲ減シ其取及倍スボノコトハ其取及ノ取

各ニ因リ其時ニ時ニ交付シ得ん 據ニ其約定ヲ為ス
第十六 船ヲ物産中我邦船ヲ以テ上海迄輸送
シテ運レ方ヲ為スニ定ムル分(上海海)ニテ何船ト共
價格ヲ定メタル分)ハ本島ノ運賃係花咲港及料ヲ
モ要ホスナシ

第 四 條

利息起算ノ事

第一 利息ニ年八分ナトシ之ケ年 兩度ツニ
之ルモトスナシ
第二 利息ニ船ヲお債ヲ交付シタル日ヨリ起算
スナシ尤本名ノ原ボノ日本ヨリ運送シテ為スル
船ヲ船名ニ寄テ其欠運シノ日ヨリ二月一
日乃本名ニケ

日ニ之ヲ寄名シテ其起算ヲ為スナシ

第三 上海、送ラテ運送シテ為ス物債ニ日地ニ至ル
ニ其運賃ノ元船ヲ以テスナシ而シテ其物果ニ海若ノ
名ヲ支取ル船名ニ通名シタル日ヨリ其日ヨリ欠
運シテ船名ニ之ヲ寄セバ其日ヨリ利息ヲ付スルコト
スナシ

第四 日本ニテ交付スルお名ニ元船ノ船名運賃ニ
ノ其欠運シノコトヲ派由委負ニ通名セシ日ヨリ其日
ヨリ欠運シテ船名ノ割附ヲ付ケお名ノ手取運賃
載レ置クナシ

第五 利息ニお債交付ノ日ヨリ起算スルコトヲ
決スルトキハ其日ヨリ海運運賃ヲ欠名ノ日ヨリ
此日ヨリ欠運シテ船名ニトテモ決スナシ

第五條

概算ノ事

第一 全税ノ概算ハ交付ノ年額ニ概算シテ先所海
 關稅票ヲ更ルルコトナレバ之ヲ其額ノ概算トス而シテ
 此概算ヲ更ルル迄ハ支那政府ノ委付一物價ヲ海關
 (日本又ハ海關) 所定ノ代價ヲ以テ算スルコトナレバ
 之概算ニ之ニ充テカキトス。確信スヘキ外國バレルノ
 期ハ海關形カ又ハ概算ナル物事ニテモアリトスル
 第二 海關ノ概算スルテ概算トスルカハ先所海
 關稅票ヲ收入スル稅額ヲ調査シ其差額申渡シ
 之レヲボシ概算トシテ分テ抽算シ其差額ヲ以テ先所
 年額ニ充スル所ノ及テ概算トスルコトナレバ
 第三 此見積リ限外ハ交付ノ年額及利益

ノ額額ヲ積算シ(交付ノ口ヲ十年間總計也)而シテ
 該海關ノ收入スル額十ヶ年ノ稅額ヲ積算シ(此ノ
 概算トナリタルコトナレバ)其差額ノ若干日年
 トシテ概算ヲ更ルルコトナレバ

但海關稅ノ平均額ヲ算スルコトハ先所ノ
 概算ヲ以テ算スルコトナレバ

第四 此概算ハ交付ノ年額ニ概算シテ先所海
 關稅票ヲ更ルルコトナレバ海關稅票面ニ
 期日ニ於テハ其概算ヲ以テ該港ノ海關稅
 ノ文字ヲ記入セシメ且概算ノ年額ハ五千兩以下位
 ノモノニ概算セシムルコトナレバ

第五 又此概算面或ハ約定書中ニ
 概算ノ事ハ其約定書中ニ約定スルコトナレバ

權利ヲ有し而シテ支取政府ニ向テ所押ノ更給
アルモ必戻債者タルノ義務ヲ負フ事ヲ記載セ
シムル

第六 又此種票面額ニ約定書中ニ於テ票額ヨリ
持ル債主ニ對シテ何處支取國ニテ國内又ハ他國ニ於テ
テ開クコトアルモ此種之票額ニ對シテ何處支取國ニ於テ
一リ且共我々ノ債主ノ内國トシテ之ニ對シテ何處支取國
トモ支取政府ニ對シテ之ニ對シテ其正金ヲ爲スヘカラカ
ル事ヲ記載スル

第六條

正金期限ノ事

第一 貸付金ノ正金期限ハ海峽領事文書ノ
ヨリ是レ年々抵上リ(利息ハ第四條ニ因リ每年兩分

之更ハ正金補フ後トス)其向十一年然ト定メ毎年一
度元金ノ十分一ヲ拂込ムコトスルニシテ其日ロハ
帳簿ノニ所定ハメ約定書中ニ掲載スル
第二 貸付金ノ正金ハ於テ我々貿易限ヲ以テコト
ク記スルニシテ其海峽領事文書ノ時ニ用フ
ル刻金ヲ以テスル

第三 若シ支取政府ハ貿易限ニテ正金ナルコトヲ
スル時ハ但シテ何處支取國ニテスルコトニ對シテ其正金
ガハズレテ我々輸送し貿易限ニ對シテ其正金
ナキハ其正金ヲ且其正金送付及運送内海峽領事
利息ホラシメ且其正金送付及運送内海峽領事
分金自ノ刻金ニ對シテ約定書ニ掲載スル

第四 若シ又誰かノ政府ハ其正金送付及運送内海

規則ニテ印入ルヲ此ニ其通印ノ如ク規則ノ如ク
本條書印又ハ英法ニ對シテ發行ナルヲ較量シ
為シテ之ヲ轉換シテ我レニ換出ナキニ於テハ海規則
ニテモ此通印ヲ更カレトアルヘキ旨ノ約定ヲ為ス
但此更印方ハ我レノ都合ニ入ルルニ止ルルニ止
ス時ニ於テ其ノ時ニ用フル所ニ於テハ福後トス

第七條

公債發行若クハ事

第一 此條付在ニ第一國之規則ノ如クハスルニ付
規則ニ其内メニ日本ニ於テ公債發行若クハ事
コトヲ規定スルコトニ
但此條若クハ事ノコトヲ撤回セシメテ後
亦ハ事
抑テ要求スルコトニ規定スルコトニ

第二 華ニ之ニ承諾セハ其約定書ノ文章及若クハ
政府ボハ若クハ香港之海パンクヨリ支那政府、英
也シ約定書及ノ文例ヲ翻訳シテ便直ニ之ヲ取
シ

但香港之海パンクノ約定ニ第一條時ニ上
ナキニ付亦立条ノ六章ヲ英若クハ之ヲ増補ス
第三 此トモ此條付在ノコトニモ此更印公債
若クハノコトニ 規定セラルル旨 突允之ヲ
許トナルヘキ能ナレハ 止ル所 但此更印
但此更印ノ都合ニ一時ニ及テノ多
能ハ事ヲ要求スルコト

第八條
海規則金ノ事

第一 通商船隻の航行に許通下約定者に拘印し
タル後許通者估有すお其レニ海兵隊一に移す西
ク其レヲ航行に便ハレタ後其物債ヲ交付セサレハ四
ク其物兩方共テ許通に償フコト、定ムル

第二 許通に於テ其通船先時其船既ニ日本
ノ海ニテ航行ノ物債ヲ交付シタルノレハ其定メタル
價格ヲ以テ之ヲ許通に引取り其代償系に既ニ約定
ノ期子ヲ届一即時ニ之ヲ拂ハレメ而シテ通船先
日本政府より償ハレム一キ者ヲ其約定書中ニ記入
スルコト

第九條

交付ノ物債ニ海兵隊ヲ付セザル者
第一 此條約定ニ付テ交付スル物債ニ日本領土

又ニ海陸シトモ西國政府ニ海兵隊ヲ保セザル者
約定者ニ明記スル

第十條

支那政府ニ照會ノ事

第一 此條約定ノ約定者ヲ拘印スル者に許通者此
條ヲ左宗棠より受ケタル金狀又在戈カ以信金ノコトヲ
總理衙門より受ケタル委任狀ノ寫ヲ要シ而シテ在戈、
ノ委任狀、之ヲ總理衙門ニ照會シ許戈ヲ金狀、之
ヲ在戈ニ照會スル

第二 然リトモ在戈ノ照會ニ依時ヨリ要スル
忍シテ之、西江路等江薩接界ニ海兵隊ニ照會シ
テ保護ヲ為サレシ之ヲ依據ノ據トスルシトモ在戈
ニ於テ之ニあるルノ概ヲ要スルコト

第三 又此等ヲ為スニ 協理衙門ニ 呈請アリ 派也
全權公使ノ子ヲ 經其心ニ 在ニ 海ノ 協理アリ 子ヲ 經
ルコト、おスヘシ

第四 協理衙門アリノ 委任状 在ニ 名ノ ミナレニ 許
通トノ 約定者 標 紙ノ 文字ニ 在 宗 業ノ 卷 全ニ 同リ 云
ト 昔 載セシム 又 在 幣 兩ノ 名ナレニ 約定者ニ 其 命
全ニ 同リ 云ニ トセシムヘシ

第十一條

約定者ノ 文章ノ 事

第一 約定者ニ 第一回 立 出 行 以 下 許 下 行
名ヲ 以シ 其 文章ニ 在 行 出 行 以 下 許 下 行
行 爲ニ 同リ 又ニ 要 件ヲ 設シ 且 文 書ノ 號 載ヲ 補 強
シテ 亦 事ト 思 毫 不 知 以 之ヲ 定メテ 印 印 スヘシ

第二 約定者ヲ 認定スルニ 日本 文 支 那 文 及 美
文ヲ 要ス 因テ 海ニ 在 美 國 法 律 家ヲ 雇ヒ 其 精
審ニ 其 文章ヲ 核 査セシメ 又 他。 經 証ヲ 生 入 事
ト ア ラハ 此 美 文ヲ 以 證 ト 爲スヘキ コトヲ 約 スヘシ

第十二條

協理衙門 協理 事

第一 支那 政府ニ 於テ 約定者ノ 分 更ニ 協 理 衙 門
ヲ 設ケ 海 兵 一 部 五 校 兩 道ニ 設 け 丁 約 定者
ヲ 以テ 之

第二 九ノ 年 協 理 衙 門ノ 設 立ニ 於テ 本 條ノ 協 理
方ニ 際シ 協 理 衙 門ノ 設 立ニ 關シ 方ニ 於テ 第二 條ノ 協 理 衙 門
以テ 之ヲ 切リ 一 尤 其 利 益ニ 關シ 協 理 衙 門ノ 設 立ニ 關シ

第三 本 條ヲ 協 理 衙 門ノ 協 理 衙 門ノ 設 立ニ 關シ

定ノ積載ホ正都テ此約定ニ照シテ日探ノ振合ヲ
用ヒテ有テト思量スル必ニテ之ヲ定ム一ハ此レテ其後
後シ方ニ約定日例即ノ日ヲ豫メ十八ヶ月ヲ日進ト
シテ其期分ヲ定ム一ハ又四百五拾万兩ノ内沙石五拾万兩
ヲ即ニ例即ノ日ヨリ十二ヶ月ヲ日進トス一ハ
此等ノ外他地ニ於テ陸軍ノ操練ニ當テ陸軍機有テ
スル候ハ此等ノ内ニ込載スル限度ニ越スルハ要否ニ矛盾
セザル分ニ便且テ有テテ候事ヲおス一キコト至テ合意
スル

明治十年一月廿九

左衛門右衛門

長澤 宗之助
藤田 春樹

